

新春所感

—初夢の実現を祈りつつ—

日野病院名誉病院長 玉井 嗣彦



新年あけましておめでとうございます。皆様におかれましては、晴れ晴れと希望に満ちた新年をお迎えになったこととお慶び申し上げます。

私は鳥取大学を定年退官後、日野路の日野病院に名誉病院長として赴任してから、早くも11度目の新春を迎えました。

私の専門は眼科ですが、眼科医の最大の喜びは、治療によって患者さんともども、ご家族も含めて「見えることの幸福」を分かち合えることにあります。不幸にして見えなくなった患者さんを前にして、途方にくれている初夢を見ましたが、エレクトロニクスの驚異的な進歩と生命科学との融合による生命工学の発達は、ハイテクの視覚プロテーゼ（人工網膜）などの開発を一層促進し、初夢の前途に光明をともしています。

人工網膜に関しては、チュービンゲン大学のツレナー教授らの研究グループは、微小電極を付けたマイクロ・フォトダイオードを数千個、直径3ミリの薄い円盤状の珪素製チップに塗布し、網膜下に装鎮する実験を家兎で行っています。このインプラントに光が当たると微小電極が無傷の神経細胞を刺激して、見た時と同じような像が視神経から脳へ伝えられるものと考えられています。

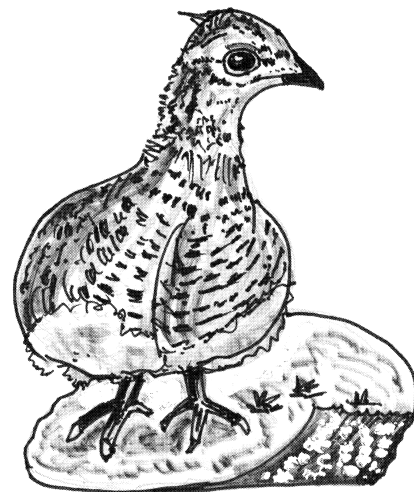
人眼には、大阪大学の不二門尚教授のグループが一昨年11月に、網膜色素変性で10年以上前に失明した2人の女性患者に、眼球壁移植用のハイテク視力補助具（49の電極が付いた約7ミリ四方の白金製のチップ）を強膜に装着後、女性の額に取り付けたCCDカメラでとらえた映像をチップに送って視覚化することに成功し、2人はパソコン画面上の光を指で追うことが出来るまでに回復したと報告しています。

乗り越えるべきハードルはまだありますが、わが国の中途失明原因の第3位である網膜色素変性患者ばかりでなく、眼球後極部の黄斑変性によって網膜が著しく破壊された視機能障害者にも、大きな文字が読め、杖がなくても歩ける時代が再び到来すると固く信じられています。

近未来の治療法である遺伝子治療、人工多能性幹細胞（iPS細胞）を用いた網膜再生療法、視細胞保護治療などの研究も人工網膜と同様に飛躍的に進歩しており、今後目が離せない領域になっています。

辰年に当たり、この種の研究が竜のごとく一段と飛翔し、発展することを祈って止みません。

皆様はどのような初夢をごらんになったでしょうか。



A. Tamai

（カットは玉井名誉病院長）